



九月部目録

△印の能詣
の季の極

○養生の法。雨風の考。秋の豊凶。
○妙茶。○季と。○ぬ祭。其外人家
重宝の。こゝハ処々ハ数多あり
ゆゑ目録ニ入レとあるニ付

九月

卦月支調子
陰陽生異名並註
初

△寒露節 九丁 △霜降中 三丁

日令

此部ハ九月日の定マツル
支の定ムルハ定マツル

○裕 九丁 △御香宮祭 四丁

△鞍馬祭 九丁 四丁
京都北野草壁神社 四丁

△醍醐祭 九丁 五丁
△木幡祭 九丁 五丁

△不堪田羨 九丁 五丁
△重陽節 九丁 五丁
△菊節

△醍醐宵祭 九丁 五丁
△重陽節 九丁 五丁
△菊節

△菊天 九丁 六丁
△栗節 九丁 六丁

△菊花宴 九丁 六丁
△重陽宴 九丁 六丁
△菊の酒 九丁 六丁
△菊瓶 九丁 六丁
△茶使節 九丁 六丁

九月目録



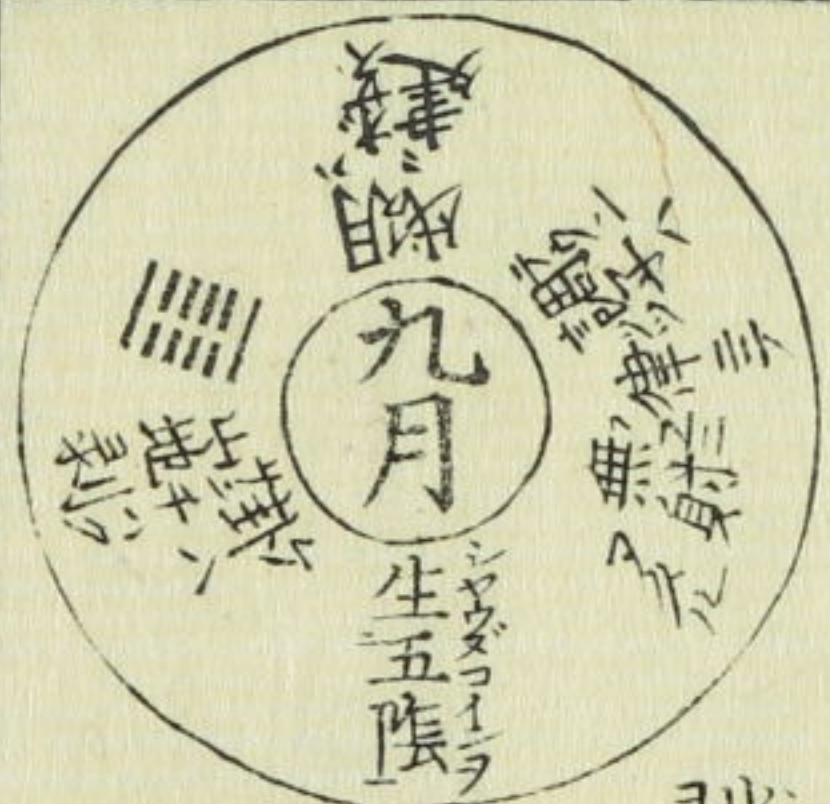
日九		日九		日十		日十		日十一		日十二		日十三		日十三	
△菊の着綿 <small>きくのかきわた</small>	八丁	△佩黄 <small>はいわう</small>	八丁	△菊花宴 <small>きくくわえん</small>	八丁	△會々め酒 <small>ええめしゅ</small>	八丁	△後雞 <small>のちのけい</small>	九丁	△京醍醐祭 <small>きやうだご祭</small>	九丁	△貴船祭 <small>きぶね祭</small>	九丁	△鹿谷天王祭 <small>かたやてんわう祭</small>	九丁
△生玉祭 <small>なまたま祭</small>	九丁	△一宮祭 <small>いちみや祭</small>	九丁	△五條天神祭 <small>ごじょうてんじん祭</small>	九丁	△下鳥羽祭 <small>しもとりば祭</small>	九丁	△小重 <small>こしげ</small>	九丁	△近江四宮祭 <small>おうみよんみや祭</small>	九丁	△九日小袖 <small>くさつこそで</small>	九丁	△全日菊 <small>ぜんじつきく</small>	九丁
△例幣 <small>れいへい</small>	九丁	△御難餅 <small>ごなんもち</small>	九丁	△太秦牛祭 <small>たまたまうし祭</small>	九丁	△後名月 <small>のちのなづき</small>	九丁	△白川祭 <small>しらかわ祭</small>	九丁	△後月 <small>のちのつき</small>	九丁	△天王寺念佛會 <small>てんわうじぶつねがひ</small>	九丁	△豆名月 <small>まめなづき</small>	九丁
△住吉相撲會 <small>すまじきすもうかい</small>	九丁	△室の市 <small>むろのいち</small>	九丁	△後名月 <small>のちのなづき</small>	九丁	△後名月 <small>のちのなづき</small>	九丁	△二夜月 <small>ふたよりのつき</small>	九丁	△名残月 <small>なごりのつき</small>	九丁	△三夜月 <small>さんよりのつき</small>	九丁	△栗田口祭 <small>くりたぐち祭</small>	九丁
△天寺念佛會 <small>てんじぶつねがひ</small>	九丁	△天寺乘會 <small>てんじまわい</small>	九丁	△都岩倉祭 <small>つづろいわくら祭</small>	九丁	△都岩倉祭 <small>つづろいわくら祭</small>	九丁	△小倉祭 <small>こくら祭</small>	九丁	△度會新嘗會 <small>たごひにいなみ</small>	九丁	△野の宮別 <small>ののみやべつ</small>	九丁	△度會新嘗會 <small>たごひにいなみ</small>	九丁

日五		日六		日七		日八		日九		日十		日十一		日十二		日十三			
△栗田口祭 <small>くりたぐち祭</small>	九丁	△神田祭 <small>かんだ祭</small>	九丁	△八幡花頭 <small>やっぺんはなごう</small>	九丁	△上難波祭 <small>かみなんば祭</small>	九丁	△淀祭 <small>いづみ祭</small>	九丁	△逆神祭 <small>さかじん祭</small>	九丁	△北山祭 <small>きたやま祭</small>	九丁	△鳴滝祭 <small>なるたき祭</small>	九丁	△津村祭 <small>つむら祭</small>	九丁		
△小倉祭 <small>こくら祭</small>	九丁	△岡寄祭 <small>おかよせ祭</small>	九丁	△婆利女祭 <small>はるりむすめ祭</small>	九丁	△旅夷祭 <small>りくまがら祭</small>	九丁	△津吳服祭 <small>つゑふく祭</small>	九丁	△八幡花頭 <small>やっぺんはなごう</small>	九丁	△逆神祭 <small>さかじん祭</small>	九丁	△北山祭 <small>きたやま祭</small>	九丁	△鳴滝祭 <small>なるたき祭</small>	九丁		
△度會新嘗會 <small>たごひにいなみ</small>	九丁	△桂川御板 <small>けいせんごいた</small>	九丁	△津大綾祭 <small>つづろおほなや</small>	九丁	△山城南神祭 <small>やましろみなみじんじん祭</small>	九丁	△野の宮別 <small>ののみやべつ</small>	九丁	△度會新嘗會 <small>たごひにいなみ</small>	九丁	△野の宮別 <small>ののみやべつ</small>	九丁	△度會新嘗會 <small>たごひにいなみ</small>	九丁	△野の宮別 <small>ののみやべつ</small>	九丁	△度會新嘗會 <small>たごひにいなみ</small>	九丁
△野の宮別 <small>ののみやべつ</small>	九丁	△津大綾祭 <small>つづろおほなや</small>	九丁	△旅夷祭 <small>りくまがら祭</small>	九丁	△山城南神祭 <small>やましろみなみじんじん祭</small>	九丁	△津吳服祭 <small>つゑふく祭</small>	九丁	△野の宮別 <small>ののみやべつ</small>	九丁	△度會新嘗會 <small>たごひにいなみ</small>	九丁	△野の宮別 <small>ののみやべつ</small>	九丁	△度會新嘗會 <small>たごひにいなみ</small>	九丁	△野の宮別 <small>ののみやべつ</small>	九丁
△栗田口祭 <small>くりたぐち祭</small>	九丁	△神田祭 <small>かんだ祭</small>	九丁	△八幡花頭 <small>やっぺんはなごう</small>	九丁	△上難波祭 <small>かみなんば祭</small>	九丁	△淀祭 <small>いづみ祭</small>	九丁	△逆神祭 <small>さかじん祭</small>	九丁	△北山祭 <small>きたやま祭</small>	九丁	△鳴滝祭 <small>なるたき祭</small>	九丁	△津村祭 <small>つむら祭</small>	九丁	△周防山口祭 <small>すおうやまぐち祭</small>	九丁

九月令 此部不日定らる九月
 一ヶ月のくわあつちりす
 △伊勢御遷宮いせごみせんぐう
 △番船ばんふね
 △早綿はやわた

九月之部

△印付るハ世身能諧
季寄出て用来る景初



剥群陰陽也
剥尽寸月多
仍て草木花
幹凋て
剥落也

無射陰氣外陽氣降て萬物陽
氣小隨ひて出て貪るははらへハ
虫魚の類蟄伏し草木根下歸り
潜むは射は仍て無射と云

異名

△季秋 礼記の暮秋 留書米珍
△梢秋 四時纂要 晚秋 韵府

△無射 礼記の寒露 韵府の玄月 異名
△素秋 韵府の菊 秋 事物異名

和名

米月 紅樹月 菊月

△菊開月 △寢覚月 △紅葉月

△木深月 △小田刈月 △梢の秋

△長月 可るは八月の口あるす

異名註 △季秋の季の末の秋の暮と云ふと云ふ

秋とい秋の暮と云ふ年の暮と云ふ暮と云ふ夕の暮にていふ未

秋を名の秋なり△梢秋の梢のこもるよと 諸木紅葉一梢の

るはくゆへ梢秋といふと季吟のいり△晩秋の暮秋と同一

晩の秋といふ事なり△無射の上のり△寒露の節の名なり

△玄月といふ玄のクロレ、訓黒といふ絶陰の色なりといふて玄月と云

△素秋といふ素の白の秋乃金気の色なりと云ふ金の本色白たれと

あり○菊秋といふ當月の菊花乃咲出る月ゆさう 菊開月といふも

同一ありあり
⑤ 藏玉 寢覚月 家隆
いづくかたなる一枕の暮さる月
秋のたへぬぞれ秋をうり

秘藏 彩月

月を鑑ふのりり月ふありあまの
あまの月を鑑ふのりり月ふありあまの

莫傳 菊開月
あまの月を鑑ふのりり月ふありあまの

聖玉集 梢の秋 木末の秋を實際
あまの月を鑑ふのりり月ふありあまの

莫傳 紅葉月
あまの月を鑑ふのりり月ふありあまの

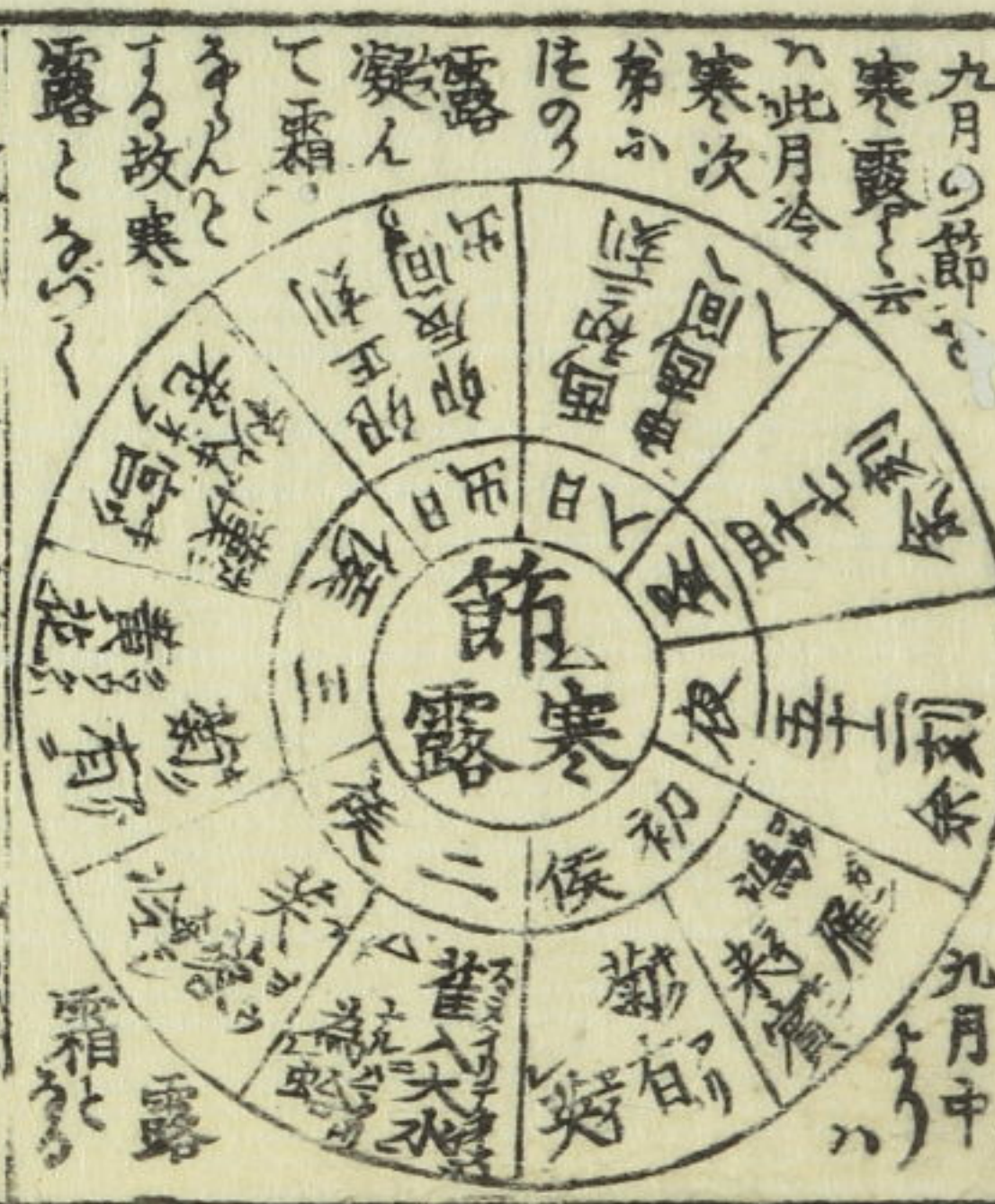
新古今 長月 花山院
あまの月を鑑ふのりり月ふありあまの

藏玉 小田刈月
あまの月を鑑ふのりり月ふありあまの

寒露 九月節の名の七土候の草木
あまの月を鑑ふのりり月ふありあまの

七十二候の草木長短を記す
あまの月を鑑ふのりり月ふありあまの

七十二候の草木長短を記す
あまの月を鑑ふのりり月ふありあまの



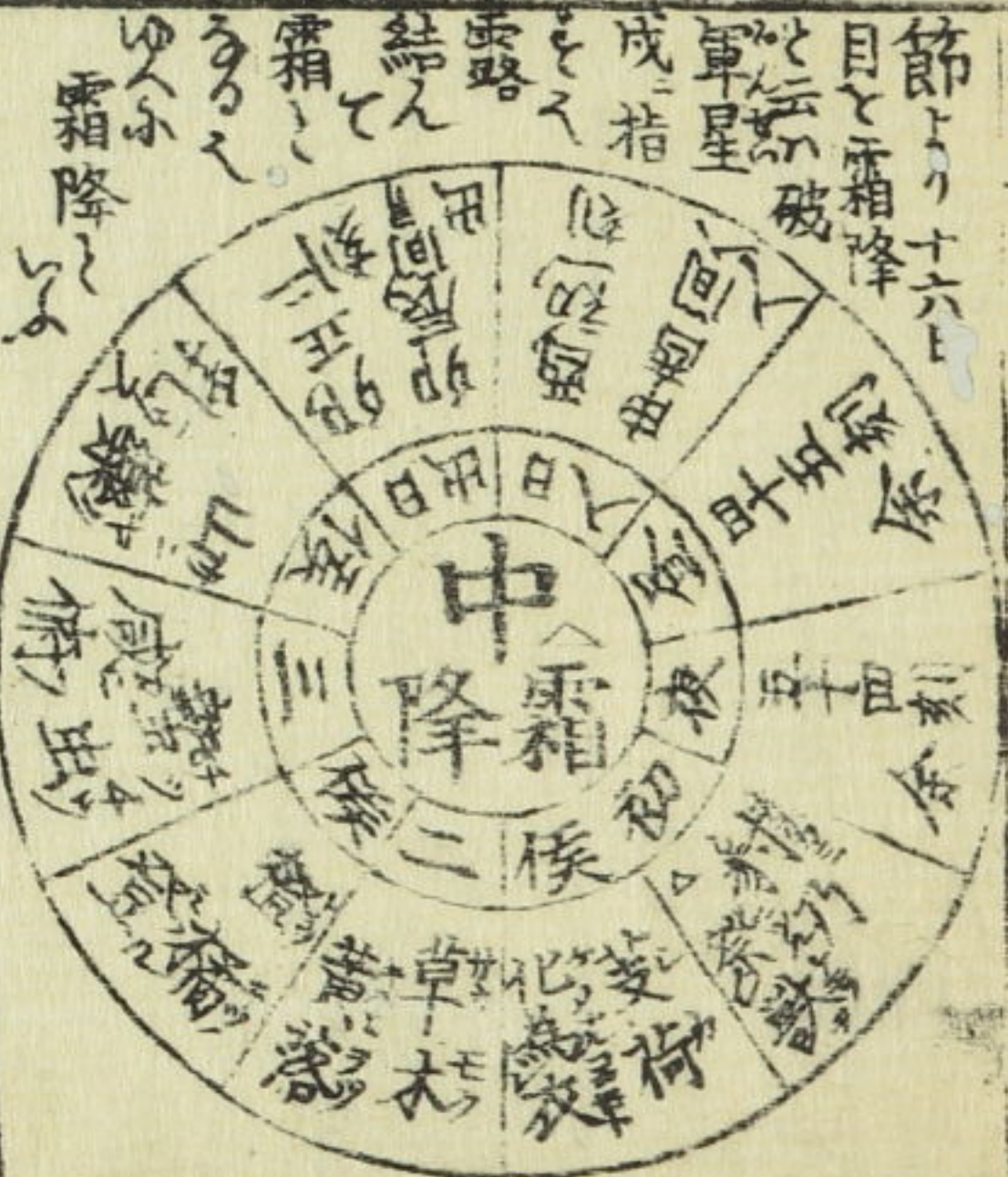
九月の節 寒露云々
此月冷 寒次
九月の中 雁来賓
鳥雁来賓と雁の仲秋先來の注より季秋ふおれて來る日の續とさきなり○露有英つる花既ふひのりんとて英つると云△雀海入て蛤やるるどて飛もの他と潜物と動物の天の理なり故ふ潜物又動物とさるなりたるは田鼠穴居や潜物とさるなり水蟲蜻蛉と成毛虫蝶と變守皆天道の盈とて不足の補を盈つる益ととて不足の補を盈つる益

減と故小飛ぶ物ハ潜む所謂也
斯一○芙蓉冷一とい荷葉枯破きて倒て様物凄く冷一
菊有黄花とい既盛んよ開くとつる黄の菊の本色なるかきり○漢宮の漢の代の宮女の物なほいとてひとさる居るふたて秋ふりさるふたさうひて婦女たりのそのおりの頃ふるりさるといさるり

節天氣占候

此月己午は方より雲出き

必風まつく北西の風久く吹くと風の後小雨ふる此月のせよ○十日十九日十七日必風雨のあり日入雷ふれ米賣し虹と麻の價貴五穀もなり月蝕あり年ありて凶年あり
霜降 有虫多と主候 草木七十二候 且出入昼夜の長短左ふ記と



△豺の山犬と云狼の尤性より
 かゝる獸より鹿鬼の類と殺
 して天と祭る。○麦の菱の
 浮葉より荷の蓮の葉をさ
 枯て羅のすけを故衣と化すと
 のひより○草木黄落の諸木
 と云る紅葉。○草黄も枯
 と云るの橙はだのくさり櫛
 みくへ此類を登る。○蟄虫
 咸俯。○虫の類ハ蛇蛙
 よう守咸地ふるとも俯と云
 ○山藥の自然諸讀あり

乳をとい実の入る事乳の
 たるやうをれりあり

日令 九月の日は定むる事
 支の定むる事此部也

朔不成 今日雨風やれぬ
日就 風霜と飛を人民擲す

裕 今日より八日を着る九月
 より綿入る夏は四月朔より

五月四日を裕と看と諸礼家の
 式より三ツ國會の出單物の近來の物

狂 ひつゝたの草に若れぬ
 ありてきしんくいの秋意 宮内

伏見御香宮 今日出山城国伏見

名御諸神社の神功皇后を
 祭より今日御放所へ神輿御出

ありて九日を御出中
 旅所の大亀谷の東ふありて古御

香と称ふ是文祿年中
 遷座より外あり祭の當日九月

朔日 京 鞍馬祭 今見出 神輿渡 祭元更 御今日

御旅所へ御出九日まをり 契 明神と云。大己貴尊と云るまをり

朔六 天王寺金堂 安 宮嶋令 日坂 舍利講刻音祭 藝 日市あり

南 氷室祭。南都四十四氏神と 都祭の春日伶人舞祭あり。大知

○春日若宮御繩棟の式今日あり 若宮御旅所の常の儀。今見假社と云

二 今日晴るれい來年春雨あり 日あり。今日房事と慎みへり

南 東大寺鎮守八幡祭此祭 都久く退轉せり。京都天明

火災の後故有て再興せり。けり あり。昔の復つと嚴重なることと

三 北斗小御燈と奉らる。清の 日 年中行司 貞世

ふ向らる星のいろはほふふか ともはよむ。秋のそりし火

京 大通寺六孫王御出。多村觀 都 音堂水仕。山城國まろり

四 京 北野 辛莖神輿。北野天 都 神祭。八月まらも今絶

了今日氏地より 辛莖御輿とて菜 葉と以て神輿と造り渡御のよびと身

五 山城 醍醐祭 御出今日あり 委しく九月迄を

○萱尾明神祭。醍醐のこま み日野あり

木幡祭 持大明神と号す。天忍 骨奠。宇治郡本幡の里有

六 京 高臺院殿忌。大閼秀吉公の 都 政所。高臺寺方々かて職法あり

七 不堪田奏 昔ハ諸國の田の損 亡あり。所々の目録

をして奉らるれかつさて租税と免 一あやしくあり。作ふたふたる田と

ハ心そ不堪田と云あり。公事根源 年中行司 け秋の子町のそりぬぬ

（非）而此の多門の云や不遠田 共号

京○久世祭○久世の神社○久世郡寺
都田村の氏神○寺西の留久世村祭

（云）万葉 やはらの久世の社のまゝなりを
以てありてはるるもさしむるれを折七

遠○中郷祭又飛神祭とも云○祭神
春日御太三命と合せて五社明神也

如上 占候 北風東風吹けの來年
三月七月米價貴し

日八 桂宮相撲 六条北西洞院西
ふりじとを拾取抄

京○泉涌寺舍利會○湛海と云
都僧嘉禎未宋より持つて舎

利と云ふ此日音楽あり泉涌
寺の台密禪律の四宗あり

○玉水祭○山城国井手町の郷
玉水乃里なり

江○勾當内侍祭○堅田の浦が塚あり
州夜祭人内侍新田義貞の妻

醍醐宵祭 今夜社前を能三
番あり宵宮能と云

九 不成 重陽節 節△菊天
就日

△茶節△栗の節句△栗のこゝろ
昔ハ天子御殿にお出御ありて今日

節會行つゝ韻と探し文に作り
文臺小居て講せり本女今昔根原

今日と重陽と云ふは九の老陽の
数なり九に陽重と云ふは重陽

と云ふなり○重九といふ九九重の
故聲小應と名づく○一説に

種九といふ是は俗に長久といふ
同音なれに祝ふるなり

菊花宴 △重陽の宴△菊酒
△菊瓶△茶葉代衣

今日群臣小菊酒と云ふことあり
茶葉の袋と身小佩び又ハ茶葉

の葉の付る枝一折て頭ふることあり
悪氣と去る云理也此ハ故是有

重陽の事并菊花酒造法故
支詩等委し日本歳時記

出と見る處

○二巳端午七夕重陽の昔

祝人右四節も陽の月陽の
日なり是陽と責ひ陰に

意あり又上三の餅端午の粽

長陽の菊酒又栗等其節の物

故是と食ひ又送るを

其日の佳節と祝するは

○年中行事 内大臣

くまの紅雲おしり目もさうそて
くみたさうかうの酒のさう

玉葉

新院典侍

秋と冬の花瓜かして九重よ
ふかぬとちれきくれさう

風雅

慈鎮

くまのつひ八きさく葉とれさふ
かきひもあうなふらん

詞 ぐまのちき。葉はさうよ。長

月の々々。々々とさうけき。々々
さうま。くまのつひさう

○連 竹の系ふれ汲そん葉のみ

○非 かりけのくまの葉の丸

葉切 小まむも果とさの葉

かうけ庵のさうやうさう

○狂 いかへのあけはれの葉の酒

くま九重のつひふれさ

菊の着綿

枕草子小九月九日
の菊と綾とすじ

の結つてとて蒸らせらるる

此日の式と調んとて前日より花

小綿とませて風霜を防く為

り此日菊の開きさうもあ

綿と菊の大ききとさう色と

はあておらうとさうさう

今も猶大内よの菊乃とさ

ら宮女は手ぞさいとほ

たまふ

○非 忌宿や髪ふゆれと大受道古

○芳かけ置一葉の綿をのこへとも
おりのいさそあふれゆる 相模

九日 佩萸 此日茱萸ヲ佩ビ
菊花酒ヲ呑ム

ハ昔長房が桓景ニ災ヲサクル術ヲ教
タル故事ヲ由來トス此事甚論アリ
委シク日本歳時記小井明ス

○唐土ふへ今も今日山小の不
つて菊花酒と呑む婦人茱萸の
体とあふりし事文類聚小出

菊花宴 周ノ穆王ノ愛童ヲ
慈童ト云シガ罪ヲ

蒙ムリテ鄴縣山ニ謫サレタリ此
山谷ニ菊花元満セリ慈童常

ニコノ菊ノ満リヲ吞シガ終ニハ
百餘歳ノ壽ヲ保チ魏ノ文帝

ノ世ニ出テ彭祖ト名ヲカヘ文帝
ニ此術ヲ授ケ奉リシカハ文帝ユ

ヲ受テ百年ノ壽ヲタモチ王ヘリ
斯ル例ニヨツテ今日菊花ヲ酒ニ

ヒタシテ用ユレバ壽ヲ一ト云傳ヘ
タリ委シク日本歳時記ニ出タリ

詩 重陽五字對句

同ト

捧萸萸香遍 臨風孟嘉帽

稱觴菊花濃 乘興李膺舟

詩 全七字對句 詩礎

今日暫同方菊飲 獻酬杯

明朝應作新蓬飛 客中愁

詩 重陽之詞 崔國輔

秋葉風吹黃 颯々 アキノ木ノハニカガ
ノケバキニダ色テ

トキル晴雲日照白 鱗々 ノラノハレ
タル中ニ白

雲カアルソレヲ日ガテラセ
シロイイロカキラトニ心 歸來得問
朱

黃女 山カラカヘツテ來タ茱萸 今日登
高醉幾人 今日ヤニハホツタヒトヲ
九月節句之尺牘

九月 日令 九ノ八

重九鄭重々黄花馥郁儷有

送壺酒客敬待公之曳藜於

叢間催風月與趣連々玉巔訶々

重九 佳節○九日○登高日

○莫節○九々良日○黄花佳期

鄭重 至祝○嘉幸○致飲

○申悅 送壺酒 贈孤樽○以

酒壘 曳藜 寄駕於 蝸庐

○來叩 蓬戶 風月興趣 尋芳

玩景○寄趣 烟霞 連々玉巔

自作口頭吟○五七言之芳韻

九 あつめ酒 今日より式事の酒もつめて用はせ

世諺問答も出さる○抑元具の屠菘酒を用ひらるるも 桃花昔

蒲の酒も式正の冷酒あり食物本草にも酒の冷飲の宜しとて

冷酒のそと用ゆると貴ふ

○非 あつめ酒の酒の冬は 雪水

九 後雛 雛の三月の部小委

○非 南方より官しての雛小雛を鼠

月と月の中ふらるるは乃ひか沾屋

在 長らわに産くさる入るるも

秋風小出る後のひよる邪 負柳

九 京 醍醐祭 下醍醐長尾天満宮

日 都 醍醐祭 郷中の氏神とい

○上れい清滝権現の護法神と

とも今日神輿と渡り下れ

天神の社頭不能あり 笠取山の

山上山下に鎮座あり

○為そくまほそをわつら向
まなみの法勝のまや 慈鎮

九 貴船祭 祭神二座高麗。
奥御前 當社八龍

徳の無跡小して雨と祈り雨を止
ひる事と祈り御神あり

○新古今はね田のうらほをうせ
うけてせせふらうの林 加茂平

九 鹿谷天皇祭 浄土寺村十禪師
よりりともいふ

祭昔ハ廿四日なれども今ハ九日
あり京銀閣寺門前小十禪寺社あり

○中村祭。長谷の内なり夜ふ
行つ故俗は盗人まらりとつ

九大坂生玉祭 祭神活玉神今
日流鑄馬等あり

九 河内一宮祭 平岡神社と云祭
外和州春日同神也

○科長神社。祭ハ六月八月九月
九日へ山田村東條あり延喜式出

肥。長寄諏訪明神祭。傘針
前踊等あり甚まは十日ハ鹿解

と九日供じらる鹿とて各拜
殿にて鹿と着とて酒と香とつ

播。明石大倉谷稻八神社祭
磨祭日ハ三人牛に乗て社頭へ

泰。例式わりゆへは牛来祭
ともいふあり

九 天氣 九日晴と至る雨降し
少は晴るれハ冬至並

来年元日兩日晴天う冬中雨
も少なり若雨降ハ月中降はハ若

降されハ豊年ノ兆なり。終日東北
の風ありても豊年ハ西の風ハ来年凶

九 日小袖 御湯殿記曰九月節
白く二ツ襟と云ト今

日より縹色小袖と着と小袖
ハハ縹入まのこくあり

十 十日菊 後日菊ハ節後菊
ハ残菊ハ菊ハ残芳

ハハハ

狂冠の礼と成してのさくく
めとちり初はさるる 百二

十京 ○六孫王権現祭。八條北大通
寺あり。六孫王經基公と祭る

二十日 御難餅 ○日蓮上人七字の
題目とくく又一流

の宗門と立て安國論と著へして
諸宗ととくく故平の時頼怒て

伊豆流と三年と免れ鎌倉
不帰に尚諸宗と誹ふよりて弟

子とくく土の牢ふ入ま文永八年九
月十二日鎌倉龍の口くく鹿ふて

首と刎んと時頼の子これと憐
とて死罪とをくく佐渡の国流と

其後大赦ありて帰る上人遷化の
後弟子の僧竜の口ふ寺と建る

これと龍口寺といふ今日叅詣
多し像の前ふ姿と供ふ今日

難ふあひひ今日ゆ今日とる
餅と御難餅といふ事

二十日 京太秦牛祭 ○太秦廣隆寺
といふ桂宮院

内ふ如藍神あり大酒神と云聖
徳太子川勝ふあふて建る丸く

摩多羅神と祭る日あり上宮
王院の庭ふ於て紙の衣と着て牛

小乗と高声ふ祭文といふ此祭文
甚奇と委く追て補遺ふより守

排えおのよれ流して牛ふ素堂
年系ふやのけり皮つと桃隣

二十日 大武峯祭 ○田身山嶺とく
和本殿の中央大織冠鎌足公人

三十日 今日暗ふれ暗くつてくく残
綿とくく多の雨降る冬雨雪多

後名月 △後の月△豆名月△栗
名月△二夜月△名残月

△十三夜。此夜の月と賞とる事
寛平法皇より始る保延元

年九月十三夜ふく雲いさく
月明く明月無双のより仰

出されしより今日と明月と
いふ中右記不出 鳥羽天皇保安二
年小関白忠道公九月十三夜の月
を賞ししたる詩あり 歳時記出

○五雜俎曰上己有風梨有蠹中
秋無月蟬無胎九月十三夜晴とい
釘靴掛断繩といふ其外説多し

日本歳時記不委いたるハ畧之
○民俗令夜多と豆とゆき 倉文栗
とも食と批沢委く 歳時記拾遺
しつ書不出より 面白きことなり

○續後拾遺 二夜月

とれしつとねのまねをさるる
こといしつとねのまねをさるる

草庵集

頓阿

おれしつとねのまねをさるる
月もえふおふこといふらん

○連 玉のねふん 月の二夜は宗碩
○俳 本考は渡もききさるる月

僅いも木の回ふたさるる月 蘭
豆を合て豆の花も泳めさるる 豊貴

招きよれとねのまね 後の月 去来
義経のるをさるるのら月 乙由

○狂 名月ふさう 似て月の歌つとね
ニつらういのとく 草月 金波

○九月十三夜詞 林春信

○季 秋逢過 十三天 未ノ秋ノ中デコヨ
ヒ十三夜ノ空ニ

月ヲミルトキ 明月無雲自粲然ノ明
ニアフタヅ 今夜似星残菊

月ニ雲ノサハリモナクテ 今夜似星残菊
オシカラ光リガアキラカナ 今夜似星残菊

色 三三 星ノヤウニ三元 蟾光不映一欄
残キクノイロヲミレハ 今夜似星残菊

○前 月ノ光リニハアテランカン
ニハニキラクトスル

○三 大住吉相撲會 △室の市
△外の市

○日 今日神輿場の宿院へ渡御
あり相撲十三番あり故ふともあり
會とよふ今日社頭ふ外あり 鉢と
高ふ是と宝の市とつる市笑姿
の神あり 諸国市の始めとけ
○俳 非 非 非 分列する月とる芭蕉

在 年考一松竹のいれあふれ
これこそ人の室をりたり 貞柳

三十 京 白川祭 祭神天満宮白川村南
の方有知の生主神と守

四十 坂 天王寺一乗會 昔の今日
修行地

十五 日 大念佛會と行るりくし
おれも今の絶りくし中世より

五十 大坂 天王寺念佛會 今日未
刻六時

堂と修行と太子の鳳輦と六
時堂より奉り舞樂あり當寺に

て涅槃會聖霊會今日の念佛會
を三大會といひて嚴重の

法會あり俗に柳祭といふ
○三津八幡祭 ○玉造稻荷祭

五十 京 岩倉祭 北山の岩倉山り
より祭神十二座

より北岩倉大雲寺の鎮守とい
昔の王城の四隅に岩倉ありて社と

れて帝都の守護と守是の其一
あり祭礼夜に入神供と奉る

五十 京 粟田口祭 午頭天王と祭
る餅十七本あり

登り粟田御殿に入り夜に白川
橋と越て知恩院さうひの細き

板橋と渡りて上りて餅の曲
持あり甚面白きこととぞ

五十 江 神田祭 天平二年小大己貴
命と鎮座姓古の

神田とて国々大御宮へ初穂と
納むる御田あり大己貴命の五穀

の神さし右神田より此神と祭
る其後延文の頃より將門の灵

と本殿のわたりて祭ると今二
座と守祭りの隔年とて子寅辰午

申戌の山王祭と此祭と江戸の大祭と守
俳 ころはるの神田体系 李々

五十 前小倉祭 祭神三座入應神
天皇神功皇后玉

依姫より十四日神輿つり殿小渡御
やぶらめあり夜分後あり十五日祭入

十六日 山城崎祭 東天王の社と云
西天王の社ハ吉

田山の麓有鑄七本あり神輿
先達てゆく是と鑄とまらうと云

其内一本の鑄銀はバの上ホ土ヨ
つろ大鷹とや名づちて大鷹

の鑄とつて神室と守 雍州府志出
一書祭ハ九月十五日入とつろ

○伏見三洲祭。天武天皇と祭
入又午頭天皇ともつろ十二日御出

○岩屋明神祭。神体宮道祖
神ハ山科大宅村の東あり

十六日 度會新嘗會 神嘗祭
今日

伊勢外宮へ天子より新米の初
徳と供し度會とハ伊勢外

宮鎮座の處の名あり内裏新
嘗會と同一と云 俗ハ御祭

と称と明十七日内宮ふあり事
実外宮と同一事あり

○非 せえも名かりマヤ常長
神米涉ひろふいせのまかり東巴

十六日 江の神明祭 十日より十一
日 戸日迄入祭礼の間甚賑あり

寛仁二年九月十六日此處小鎮座
あり生姜の市あり祭詣の人

兼生姜と求めたり家毎小糠漬
の中入漬これと喰ハ年中

邪氣感冒れ愁ひ依のがふと
い俗ハ生姜祭といふ

十六日 堺 大丹 波祭
祭

桂川御被 桂川ハ大堰川の末
流と松の尾あり

南ハ桂川とハ伊勢の齋宮より
立ちハ皇女明十七日群行多あり

前桂川とハありと云あり
く次の野宮の別ハありあり

く次の野宮の別ハありあり

七十 不成京。諏訪祭。六条鳥丸と
就日都。蘇の同より丁ふあり

野々宮別。伊勢大神宮へ齊
宮ふるくせうん内

親王三年の同野の宮ふこりり
物いしりひて勢州へ旅立ちん

其とた天子まろく櫛とて
齊宮の頭ふさせうんこれと別

まの櫛とて野の宮のまろく
つんこりりせうん野の宮とこ

うれてつぎへ行ふとてつらう野
の宮へ小倉山の辰己なる藪の内

小古跡と残しんも古の處と
ト定めてこりりせうん

つしんもまろく及しゆふ
野の宮の古跡象々ふあり

齊宮のこくへ後鳥羽院の御
宇と絶く

七十 提津穴綾祭。池田の民家の
北山上ふあり綾

羽大明神と号す應神天皇卅七年
百濟より呉の国の結織女四人と

りて織しめあひん今呉服と
り此呉の国の者れ始りてり

たるゆり又和訓ふりり
とはまろくとり此あやとて穴綾

と織る故ふ名づくあやとてり
の畧へ此地ふ祭とて應神天皇

仁徳天皇乃みまこの地をれと
ひるぞり

あやまろく又ゆむとてり
あやまろくはめとてりや氏久

年ひよらうてんれれ糸かま考
今日遠く行く事といひ道ふ

提津具服祭。池田の田圃
の中ふ祠あり

穴織の祠ふ隔つこと十町ぶり
事実前ふふとけ祠あるいひ

りれ結をうさる地なるま池
田をくれとの里ももつり

八十六 ○今宮祭 やぶさあらう祭
坂神五座あり

○天王寺廻廊立花。十七十八両日
○高津宮祭。夏祭六月十八日

十九京 ○南禅寺龜山院御忌
都 ○妙傳寺七面明神開帳

廿 今日齊戒沐浴。と心と淨く
これハ吉事と得るなり

廿山城南神祭 祭る丸七社下
の鳥羽中嶋壇

上。塔森。石倉。竹田。小枝の土入産
沙神守むり鳥羽上皇乃離

宮ありて是と城南の離宮や
いひたりて城のまゝふあはし

ゆへなるぞし今ハ鳥羽帝と
あつせまらるといふり

廿波利女祭 高辻室町西
あり俗ハ鯨昌

の社といふて子孫のさくくと祈る
り此社の婆利女をりそいと
いひ誤りてハニヨといふ又それを
云あやまりて鯨昌といふなり

廿京都旅夷祭 建仁寺門前
あり榮西国師

勸請する外もて旅行の海上
れむく人の先ッ此社ハ参つて風

波の難をうへん事といふゆへ旅
えびとといふ一説十六日といふ

つうかゝるくろくハ諸国祭
礼記ハついで自白といふなり

廿山城八幡花頭 社僧弟子髪
剃り衆に加り

時草花と製し酒宴催す花の
臺ハ六月の日と多りみてはく

廿能 能の踊りあはれ
おくりなり

廿 今日杞柳の湯をゆわき
無病長命をうるといふ

北一 京 ○天道社祭。五条坊門猪熊有都 ○栢社祭。灰方の南林の内。右

北一 坂大上難波祭 俗小栢荷祭と博旁町あり

本社ハ仁徳天皇と祭より栢荷ハ地神として本社のかさりふ鎮守六

月の御抜神輿御旅渡御甚賑なり今日秋祭りと神馬の渡りあり

北一 江 ○根津権現祭。隔年あり戸祭神委り博物筈ふ出せり

北一 山城淀祭 小橋の乾ふあり淀姫神といふ傍ふ千

観法師の宮あり又一座伊勢御門神祠といふありて納所揚枝

鳥小橋の東河中ふありといふ撰社と寺淀姫の説よりあり又小

橋の北ふ大荒木社といふあり同日神事と寺又水無ふ淀姫明神と云

ありて廿二日ふ神事ありといふ是ありといふあり

北二 坂大座摩祭 梶州西成郡の惣社といふ今

日の祭と相堂八十島祭といふ口傳く六月廿二日御枝の時神輿御旅渡御

北四 河内 植松村逆様祭。廿四日と祭礼として廿五日と宵官と寺

北四 江近 逆神祭 大津相坂關清水大明神鮮丸の

宮と称す此丸古歌に詠する関の清水の旧跡よりといふ傳へて

此宮のあり丸と今清水町と称す此宮の別當と近松寺と号して諸回説経者の本地といひり

浄して説経と以てせよといふ者此寺の免状といひなるといふ説経者日暮小大夫請り正徳二年乃

免状とすのなり見たりまろの日の説経者来ると神輿と供奉とを例す

北四 山城 木幡祭 といふ今日あはも今吾人辛メと

九月一日令 九十八

不成大天満流鏝馬の式あり

六日 京都北山祭 洛北衣笠山世貞の林中小あり六所明

神く又北山天神祭とて之を拜殿として三番叟あり祭廿七日とも云

七日 大津村祭 津村御灵祭。鎌倉権五郎景

政の元々祭の故の五郎の社とも之の中世より中央天照太神左の八

幡宮右の鎌倉権五郎都合三座あり

八日 京都鳴滝祭 福と神祭。福王子社鳴滝社と

合祭もといふ福王子の初め歩菟神と云うが福王子と轉化せ

て云説あり神体は光孝天皇の皇后班子を祝ひまらうと

とぞ京俗これをも五器ありひまらうといふと云

○東山大谷報恩講廿七日廿八日見醒井菟神祭○油小路火の尊祭

廿八日 大谷の天手寺金刺講音泉あり坂の晦日石の鳥居神送り

廿九日 小倉の廿九日守○今日雨ありといふ水難あり今日能々身と悦

○今日夢窓国師忌天龍寺相国寺等持院等をもて執行あり

廿九日 住吉神送 摂州住吉と今日玉出嶋御枝の

神事行りてあり神祕あり神送りとも事社記に見え守十月と

神無月といふもへ神々出雲ありありありといふ俗説あり

今日の神事と俗神送りともありありあり神無月のともあり委

十月の部並日本歳時記ふいふともありといふと畧す

中周防山口祭 吉敷郡山口あり祭神住吉三社

月令 九月、月中、小預、雑事、景物、を出、り

伊勢御遷宮 内外、両宮、その、わり、摂社、

いも二十一年を歴、き、は、か、る、ご、造、營、あ、は、り、り、九月、を、し、つ、く、御、遷、宮、の、月、と、さ、こ、ま、る、か、

番船 △綿番 △早綿。追綿。浪花、を、て、當、年、の、新、綿、

と一時、小、菱、垣、船、小、積、込、出、航、の、吉、日、と、定、め、續、と、解、く、前、後、

の、番、と、圖、と、取、て、定、免、同、日、小、出、航、と、江戸、着、岸、の、前、後、と、争、

ハ、少、し、り、て、早、く、着、岸、と、る、と、手、柄、身、出、航、の、見、送、餞、別、小、船、

か、て、種、々、祝、ひ、と、送、り、あ、ら、う、ら、う、浪、花、と、綿、船、近、世、ハ、十、月、小、出、航、

と、る、と、追、綿、と、つ、く、綿、船、出、航、後、跡、より、出、る、新、綿、と、積、む、船、と、云、

たり 追綿番とも追綿船とも、い、か、り、こ、れ、ハ、十、月、乃、季、と、な、し、て、も、可、き、く、ん、か、

俳 番、亦、や、柿、と、さ、る、紀、あ、り、鬼、貫、

る、事、の、出、て、日、教、も、あ、る、ま、り、午、川、

番、亦、や、い、ま、移、も、化、し、ら、る、平、刀、

落水 那、の、実、の、う、ら、た、り、田、か、た、

と、ら、い、氷、と、切、れ、ん、事、を、り、を、と、ら、い、稻、よ、う、と、の、う、と、う、

俳 海、一、水、考、考、一、日、お、も、さ、る、茶、番、

海贏廻 海、螺、の、か、り、糸、と、巻、席、の、上、に、廻、り、打、出、り、

た、ら、と、勝、と、守、兒、童、の、戯、ハ、三、つ、回、

日、並、記、事、ハ、九、月、九、日、小、限、を、夏、と、と、ら、い、も、と、ら、い、見、童、の、遊、ハ、と、秋、冷、の、節、より、冬、へ、ひ、と、お、り、小、番、と、

新綿 此、項、新、綿、吹、出、て、賣、買、と、り、故、季、と、ら、ん、

哥ハ新綿の夏ハ詠と新綿
 くらたて真綿のよき七月十六日
 の如委 俳ハ新綿と訓と詠
 とたれ七月十六日の季ハ新綿と
 詠いていふとまの木綿のこゝ
 俳ハ新綿や白糸小お糸よりなる故栖

時令

此部ハ九月時節ハ
 了らる夏霜杯の夏と出

暮秋

△秋の深△冬と待△冬
 △冬△冬と隣りつる

も九月中頃より晦日までの夏と
 尚次なつぎの詞のきた△印いんある
 能のうの季ハ用ゆるるる哥ハ秋
 の名残なごりおさまるる心と多くよる

哥家集

秋の淺 正徹

くらたまも秋の浅ハ川さ
 くらたまもいへり生れ系ハ

正治百首

ふまの秋 慈鎮

くらまの秋指ハ月ハかこふまて
 あしハ迷ハ有明乃そ

後拾遺

秋と情

範永

おもとよそハいつか海や遠そりん
 多の秋とねむむ後

夫木

前中納言定家

くらまいとふおと棟のたも秋たて
 嵐うよそを死ねむの發

金葉

中原経則

あすよりハはなれぬ道の秋さうの
 北もろひふのこたんとすらん

同

春秋虫

西行

秋さうとよるハ印の夏のみこり
 こころ我とてもねむやハあつ

詞

秋のたれり。秋のかこ。秋のまね。

秋の別後。考てね。さの。後り。

△秋さうと。△秋の指△秋と情△ゆく

秋△秋ふゆく△秋考て△秋の別

△秋の名跡△秋とたて△さまよぬ

△秋△秋△秋△秋△尾花ハ秋と

まよく。霧ハ秋の初葉とたてこあよ。

まハ秋始をく人妻ふよる。やれく

小なり露ハ秋のたこおおく。霜ハ秋の
えやまをくもり切。時雨ハ冬をいそぐ

⑤ 秋のたこおおく。霜ハ秋の
えやまをくもり切。時雨ハ冬をいそぐ

⑥ 秋のたこおおく。霜ハ秋の
えやまをくもり切。時雨ハ冬をいそぐ

⑦ 秋のたこおおく。霜ハ秋の
えやまをくもり切。時雨ハ冬をいそぐ

⑧ 秋のたこおおく。霜ハ秋の
えやまをくもり切。時雨ハ冬をいそぐ

⑨ 秋のたこおおく。霜ハ秋の
えやまをくもり切。時雨ハ冬をいそぐ

⑩ 秋のたこおおく。霜ハ秋の
えやまをくもり切。時雨ハ冬をいそぐ

⑪ 秋のたこおおく。霜ハ秋の
えやまをくもり切。時雨ハ冬をいそぐ

⑫ 秋のたこおおく。霜ハ秋の
えやまをくもり切。時雨ハ冬をいそぐ

⑬ 秋のたこおおく。霜ハ秋の
えやまをくもり切。時雨ハ冬をいそぐ

⑭ 秋のたこおおく。霜ハ秋の
えやまをくもり切。時雨ハ冬をいそぐ

⑮ 秋のたこおおく。霜ハ秋の
えやまをくもり切。時雨ハ冬をいそぐ

⑯ 秋のたこおおく。霜ハ秋の
えやまをくもり切。時雨ハ冬をいそぐ

⑰ 秋のたこおおく。霜ハ秋の
えやまをくもり切。時雨ハ冬をいそぐ

⑱ 秋のたこおおく。霜ハ秋の
えやまをくもり切。時雨ハ冬をいそぐ

⑲ 秋のたこおおく。霜ハ秋の
えやまをくもり切。時雨ハ冬をいそぐ

⑳ 秋のたこおおく。霜ハ秋の
えやまをくもり切。時雨ハ冬をいそぐ

㉑ 秋のたこおおく。霜ハ秋の
えやまをくもり切。時雨ハ冬をいそぐ

㉒ 秋のたこおおく。霜ハ秋の
えやまをくもり切。時雨ハ冬をいそぐ

㉓ 秋のたこおおく。霜ハ秋の
えやまをくもり切。時雨ハ冬をいそぐ

㉔ 秋のたこおおく。霜ハ秋の
えやまをくもり切。時雨ハ冬をいそぐ

㉕ 秋のたこおおく。霜ハ秋の
えやまをくもり切。時雨ハ冬をいそぐ

詩 暮秋五字對句

望極閑山遠 菊枝花半在

秋深烟霧多 霜樹葉全稀

半山雲影前 林雨水痕收

十里風香晚 稻花山骨瘦

詩 全七字對句

季秋之詞 王維

荆溪白石出 荊溪白石出 天寒紅

葉稀 山路元無雨 山路元無雨 及公之反

九月盡 九月晦日といふも古

月晦日いかにいれり

詩 雨中九月尽 公任

新古今 閏九月尽 大政大臣

詞 今月の秋。今月の秋。今月の秋。

秋のたこおおく。霜ハ秋の

えやまをくもり切。時雨ハ冬をいそぐ

秋のたこおおく。霜ハ秋の

えやまをくもり切。時雨ハ冬をいそぐ

秋のたこおおく。霜ハ秋の

えやまをくもり切。時雨ハ冬をいそぐ

能く秋の果人のちうくむ庵の那季由

狂花月くつとむる一日教ふそ

野山錦 山粧の艸木色付

又草花いろく咲さるる

哥 後撰 読人不知

秋の露はまじきのも忍ぶるま

能 秋の露はまじきのも忍ぶるま

秋霜 霜冬入暮秋小漸置初

能 秋の初霜をさうに詠す茶道二

詩 秋霜五字對句

江橋暗寒雨 雞声茅店月

山郭冷秋霜 人跡板橋霜

露霜 露は月陰陽の氣を

能 露は月陰陽の氣を

哥 碧玉 後柏原院

秋もさやゆりくきおほきうて

能 秋もさやゆりくきおほきうて

露時雨 露は時雨の氣を

能 露は時雨の氣を

哥 風雅 定家

秋の雨のやうに思わくゆ露時雨と

つるも時雨もをばと波とれこ

露の秋以てこれの黄色決せり

〔詩〕寛平菊合 ぼろ草

このころの万葉をまじり草

ふゆひの種をへり葉を

蔵玉 星見草

庭のふさぎてはちや星見草

まろのあつらひを離れそと

秘藏 かりのりだ

このころの武家宿のまじりの門か

かりのりだのりだのりだ

藻塩 六ひ草

このころの山道のせいのこころ

これもこのころのむつし

篠目 かりのり草

秋のこの花のりくや

名をなすこのりかへつ

莫傳 霜見草 其名古今集より

心あふふとやねんそこの

ねんまをせりあふ葉の花

藻塩 いるて草

長月の九月ふさぎをいふてを

そよひ八多ふて万代をへん

○秋無きとて冬きくれ

みせりふあやまらるる藻塩中

花らうてそれ名けふ秋をくさ

かゝるみせりふあやまらるる

藻塩 秋をくれ花一説に秋を

あさらふふまらるる藻塩中

○獲我菊 このころの機 のふい

かひといふるの中間といふる

かのふゆの池へふさぎをくさ

志々くさるるこのころのり

〔詩〕新勅撰 月前菊 右大臣

ゆきておのれの月をまじり

まろのあつらひを離れそと

後拾遺 読言庭菊 長房

おきくたハ重さくそけ九さふ

こゆのりだのりだのりだ

家集 菊開中友 行宗

詩 菊 五字對句

露凝千片玉 曲池潔寒流

菊散一叢金 芳菊舒金蕊

全七字對句 詩礎

植處清香依玉砌

摘來泛蕊滿金樽 碎金香

濃露繁霜着似無 魏舒

何須更着螢兼雪 便好叢

邊夜讀書 夜讀書

白菊詞

幾多光彩照庭除

花ノ色ヤヒカリガアル

テコノニハラテラスヤウニウルハレウニユルヤ

イシモ、白キクニ

オイトハロカナ

コノキクハイカホトノ花ノ色ヤヒカリガアル

テコノニハラテラスヤウニウルハレウニユルヤ

城天皇大同二年九月幸神泉苑西

位已上共校菊花昌泰三年詔侍臣

菊花献斗棟八分左右番闘色香而

釋其尤者裁之殿庭

菊花香

妙術

仙茶の方

菊の莖葉もに緑米

菊品類

大白

楊貴妃

貫目貫

大般

薄色

大般

大般

大般

大般

紫あざ 小紫こあざ 鳳凰ほうおう 黄わう 伏見ふし見

常盤とこら 櫻菊おうぎく 三川咲分さんせんざいぶん 唐車からぐるま 銀ぎん

盤ばん 千重黄桐壺せんじゆうわうどう 有明あつめい

總そう 白中はくちゆう 三川咲分さんせんざいぶん 唐車からぐるま 銀ぎん

仙臺咲せんたいざい 唐人てんじん 唐車からぐるま 銀ぎん

二重にじゆう 天下てんか 天人てんじん 亂らん

石山いしやま 大朱柿おほしゆけし 郭公くわくこう 三井寺さんせいじ

黄咲わうざい 末摘すえとみ 郭公くわくこう 三井寺さんせいじ

菊品きくひん 本ほん 花形大圖はながたたいず 分毫ぶんごう

たがらぬたがらぬ 堂上方どうじょうかた 御ご

哥か とく久とくひさ 且かつ 菊の植きくのうゑ 花はな

地榆花ぢいうげ 吾亦紅われもあか 葉藤はふとう 花千日はなちぢぢ

川芍花せんせつはな 休草しゅうそう 蛇避草へびさきそう 花はな

黄金花くわんごんはな 赤金せきごん 枯腸こちゆう 花はな

色又白色いろまたしろいろ 俳はい 山やま の花はな 美み 今いま 花はな 二に 田でん

○此外△白菊△黄菊△万菊△大菊△小菊等数百品あり

○菊品とて本小入りきゆん爰小畧と右菊品とて

本ハ花形大圖にて分毫もたがらぬ

堂上方の御

哥とく久且菊の植花

の咲一をりもて委しく記と

地榆花 吾亦紅 葉藤 花千日

川芍花 休草 蛇避草 花

黄金花 赤金 枯腸 花

色又白色あり

俳 山 の花 美 今 花 二 田

岩菊花

花黄一丸多くあり
まう咲きて泡の如く

るじが一名泡きくとも云立花の
こ留まらん用ひてはむさこの類

葉の表青く背白
俳泡さくはくを名不画許六

蘆穂絮

二百余年前永祿年
中まで木綿の日本へ

種と濃さ守夫故真綿の外小綿
と云物は勿論木綿もは布小穂

絮と入て下賤の者の布子とて
着たりとて今も江戸なると

中入綿とホウリ綿と云穂入綿の
轉化せし蒲團も蒲の穂と因

て造る故の名今も大坂と木
綿と織と布とみりと云い右の記

それれもみりも母のまゝに
りるあはれ花もりり也 花俊卿

俳子なるは蒲團の海女の穂穂 宗鑑
右歌俳の故事と會とより決記

徳如故事

孔門ノ関子鶯と
云人母先ダテラレシ

カハ父後妻ヲムカハラレニ関子鶯
至テ孝行ナリシカド繼母二人の

我子ヲ愛シ繼子ノ関子鶯ヲ深
クニクメル餘リ我子ニ真綿ノ衣

服ヲ着セ兄ノ子鶯ニハ芦ノ穂ノ入
タル衣服ヲ着タリ父コレヲ聞て後

妻ヲ去ラントイハレケレバ子鶯ヨ
レヲトミメテイハク母在セバ一子寒

ク母去ルトキハ三子ニ寒シト云テ
母ヲ去ラル、イヲ止メ玉ヘトタ諫止傳

薄散

△尾花散△枯尾花△枯尾
花と云い枯る薄くとも花の穂

が獸の尾に似たり故尾花と云
△繞千載秋仲小あど砂て長月や

未時の花ふりり松よりあり
俳此の果は尾花の穂から素堂

椿宿貝

本字海石摺和名抄に出
皮とひき仁と取まかりて油

と取入の千梅説ハ畿内又ハ江東の方
説小椿と木の実と云くワツ

橘子

○橘の説とるりど多し先密柑
ありと定むなり 本神並ニ三才四
會小出

橘の子として季節用つるは橘又ハ
盧橘として哥連俳句に夏守

密柑

○非ハ橘の類その也やまを又芭蕉
吹あけぬうとい今の密柑ハ宋鑑

柑子

柑子の密柑ハ賣りの大柑
子ハ密柑ハ皮鹿く柑子の皮細密

柑子

柑子の密柑ハ賣りの大柑
子ハ密柑ハ皮鹿く柑子の皮細密

柑子

柑子の密柑ハ賣りの大柑
子ハ密柑ハ皮鹿く柑子の皮細密

柑子

柑子の密柑ハ賣りの大柑
子ハ密柑ハ皮鹿く柑子の皮細密

柑子

柑子の密柑ハ賣りの大柑
子ハ密柑ハ皮鹿く柑子の皮細密

柑子

柑子の密柑ハ賣りの大柑
子ハ密柑ハ皮鹿く柑子の皮細密

柑子

柑子の密柑ハ賣りの大柑
子ハ密柑ハ皮鹿く柑子の皮細密

柑子

柑子の密柑ハ賣りの大柑
子ハ密柑ハ皮鹿く柑子の皮細密

柑子

柑子の密柑ハ賣りの大柑
子ハ密柑ハ皮鹿く柑子の皮細密

柑子

柑子の密柑ハ賣りの大柑
子ハ密柑ハ皮鹿く柑子の皮細密

柑子

柑子の密柑ハ賣りの大柑
子ハ密柑ハ皮鹿く柑子の皮細密

柑子

柑子の密柑ハ賣りの大柑
子ハ密柑ハ皮鹿く柑子の皮細密

柑子

柑子の密柑ハ賣りの大柑
子ハ密柑ハ皮鹿く柑子の皮細密

柑子

柑子の密柑ハ賣りの大柑
子ハ密柑ハ皮鹿く柑子の皮細密

柑子

柑子の密柑ハ賣りの大柑
子ハ密柑ハ皮鹿く柑子の皮細密

柑子

柑子の密柑ハ賣りの大柑
子ハ密柑ハ皮鹿く柑子の皮細密

柑子

柑子の密柑ハ賣りの大柑
子ハ密柑ハ皮鹿く柑子の皮細密

柑子

柑子の密柑ハ賣りの大柑
子ハ密柑ハ皮鹿く柑子の皮細密

枳殼 人家垣植（非）かゝるもの
やくそく身とさうかま音

楤蒔 一ルメロハ蠻名之其実初め
生る時毛あり熟るとれ

（非）鎌倉の釈迦と楤蒔とのり多し
信州の尤多し

齒天燭子 実ハ赤小豆の如く數十
一ツまうにさうてあり

瞿子桐實 天竺桂の実あき
どの木と云ふの之

（非）蠟ハ制する物之やハ肉桂とも云
たもの実やいふは古き傳へ由

皂角子 和名皂莢△西海子。
大木あり葉ハ槐ハ似

より実ハ豆の如くさうて
垂り長三尺余小も及ぶ夏黄

白の花とひらるる

（非）さしのさう種をねさる竹夏
木藥子 葉ハ藤の如く俗ハ漢

珠小作（少）一名菩提樹とも云
るより一実実の如くして衣と

あゝえハ甚能あり

（非）むく乙の之と捨て破る衣ハ麻文

菩提樹 枝葉共小椿ハ似たり
一名ハ無患子葉ハ冬

青小似てやハ長一実ハ枇杷
似たり念珠小作俗ハ鬼見愁と

名づく能邪氣とさうて云
今ハ京永觀堂もありとぞ

川棟子 俗ハ此花と棟といふ
真の梅槽といハ大ハ異

より実と金鈴子と云形状小よ
りその名ハ菜種ハ苦棟と云

（非）木の船とて合ふはわたり杜國
せんといふて捨る果るる百川

桐油實 実ハ大ハ油ハ不
足或ハ漆ハかへても

用ゆ法あり其功荏油ハ似たり
本州瞿子桐虎子桐と云是之

掠實 木ハ榎の木似て本一
種変生するべし実も又

同一熟して黒く味甘し小鳥
好んでこれと食ふ葉ハ物と磨

き幹ハ枳す株と截盤持盤
と念珠も作り用とす

事甚多しツグまも大木と有り
榎株の實は杖と有り出さや電白羽

楨櫃實 高木あり花木瓜似
実ハ楨櫛小似て

さぐく花ハ愛とふ
能ハわけはれもかめたて多きも千代

榎實 又榎とも唇但種類多
正実と結ぶりの榎

此実の名と榎とわきて和名つら
むと黒色と深る物ハ楨半と

つきて栗より大なり葉の大
さハ七八寸ばり以て栗の同種異

物あり遠国山家これと類と
ふ榎とせうら延と手元の甚

セリきりの故世の諺ハトナメン
榎とせうら急とせうらのたつへ

つくり葉ハ八ツ手小似たり
山ふらもゆふせうら水とせん

うつくあつとら拾ふは 西行
能とら丹実や一字と落す天経其齋

老母草實 実熟して赤し四時
葉凋むを故か万年

青の名ありて唐ハ嘉祝小似
ら守用也と花鏡小見えたり

能ハむつやに糸秋阿のむの千代
ふ小榎ハ月とせうらむの實史方

栗子 異名 河東飯 天台道
果實物。砂糖舶来せり

先の栗子ハ果菓の最上なり漢
土にこれと貴く見えて唐の

李商隱が雜纂ハ富貴の菓と
云ふ栗の皮と出せり干ては

て搗粗皮と取ると搗栗と云
盤と打と打栗と云

故不推と云りついで実のこゝろ
なる木の一名鐵櫛と云り

非 只の推をさし山ちる白州
笈のう三夏推の附る亦尚白

椎柴 △推の葉 △推の小枝
△函て推の推柴と云り

推の木の実ふりたるを推
至て小枝の多き物也山人の切り

て柴ふりたる併し柴小せざ
るも椎柴と云る事あり

能ふ秋と云哥ふ冬の題に詩り
△まことは推の推の火るなり

哥 後 推 口をさし根さるる又実を
のさるる山のしるるふん

拾遺 実をさるる山の推柴の
さるるもさるるなり

團栗 榲の実さる非
休宜の眼さるる實

新胡桃 核果 ○陳倉巨室
一種山ぐる鬼ぐる

しつゝ上品へひちるると云此中
雜りて甚皮薄くて破やと

○ 唐ふ白胡桃と云るもの
ありま李白の詩あり

紅羅袖裏分明見白玉盤
中看卻無疑見老僧休念

誦腕前推下水晶珠 赤き文
ニアリテハアキラカニ見ユレトモ白キ玉

ノウツハニアリテハ見ワカラステウヤラ
老ソウガスイニヤウノジュラツニケルヤウナ

新樞子 大木多し木小壯
とあり各花あれども

壯の実と結ぶと壯の枝横ふ
は壯の枝上へ起る

俳 樞のうさの山と沖紋組簾
のの窓はあかも鈴さるられ暢中

新松子 松さるるも又松ふ
ぐりも所ふよりてつら

又松の実とつらつらさ中ふあ
るは是を仁と云る

水木子 喬木之葉梅りたる花藤りて黄也実も梅りたる攪り生む

菜萁 山菜萁。食菜萁。呉菜萁。つるも種類有り春細く黄花形と秋紅くも

瓢樹 蚊子樹 又イスノ木も其実と蚊のやうくと云

又吹けり笛の音あり此木は火災と除く火と附けり葉は風で吹出して火と避く故庭砌の生垣ふまふらるる元火除木

榎實 胡椒の大をこいて味あまき鳥よりあつ

まうてくうふ

熟柿 鳥柿のつるもあつ柿と干して製する物也

無花果 古名花をくさりの。俗に唐柿と云

鷄舌 白英一名鬼目と云

仙蓼 本名珊瑚葉と云俗に赤して小丸珊瑚珠のぶく小

好んて此実と喰ふ

又ツクミノイニ子と云いひよどり

能く此実と喰ふ

能く此実と喰ふ

能く此実と喰ふ

能く此実と喰ふ

能く此実と喰ふ

能く此実と喰ふ

能く此実と喰ふ

○枝の節 蔘のふく 故に仙蔘と
異名とらるるの本邦とて実名と
らるり又仙霊ともかく

○非 仙蔘の実が餅久のちひか三惟

○晚稻 △遅稻 △晚田 ○いづこも
いづこも実の稲

○非 稻のいほちや喰田うか支考
松尾の一夜いそげ後務外文龍

○漆子 △漆樹の漆りて
色も同訓あり汁の木

○子と汁と取ら別あり

○非 木のぬか女あぬじ漆子の宗因

○紅葉 赤葉とも云 異色 △色見州
○妻恋草 ○錦州 出上

木の葉赤く又黄ふりたりと
いへ紅イツとけりてりつと

いふ此詞と体して紅葉と黄
葉ともかく此ころ色づく葉

○搥 ○檜 ○柳 ○白膠木 ○漆 ○蔦
○柞 ○葺 ○櫻 ○梅 ○合歡 ○もろこ
みづの類あり

右の品々紅葉とつたれ九月の季

より其内楓の紅葉の別して人
毎に賞する故紅葉といへ楓の

事くより奇か楓ふかざりて諸
木の葉の赤くると紅葉と

つり又紅葉とるて山 梢の
つき又いゝ志がれは漆の梢を

よめても紅葉のこころをいひ
○楓 ○ひさだ ○もろこまもこも

等い七月の草木の部ふ委し討あり

○奇 古今和歌集紅葉の奇人
さほふのちその紅葉ふりて

よるさへんさへてす月さへ
たぐふのちふれおきふらぬへ

照と日れいりふり付きて
を田川ふたふりてさるる

いふふりあき中や終らん

草木

夫木 △葛のお糸
つとのこゆ方の中ふちふ葛も
秋ふちのいさうりゆく

金葉 源師賢

ちききこれ枯やつこ枯をつま
皆その糸の紅糸のいさう

夫木 △蔦の紅葉 家隆

つとのこゆ方の紅糸のいさう
都ふお糸のいさうのふち

新古今 △檀紅葉

うつゝつゝのふたをるは紅葉
ちききこれ枯やつこ枯をつま

夫木 △柞の紅葉 顯昭

松ふけふつふ樹のりあふらん
忘れ枯まうさみちせり

全 △まゝ紅葉 知家

人志は紅葉のいさうみちの
細川もあつていさうみち

詞 本の下りち。本はあき。
色のちきき。枝のりあふ。うまき。

つものしほ。柞の紅葉。かき。お
の下深。柞のりあふ。まじりのりあ

△紅葉ふむ△下紅葉△水の紅葉

△さきうらる△む紅葉

△紅葉枯 △山紅葉 △さき紅葉

△川紅葉 △紅葉 △紅葉 △紅葉

△紅葉 △紅葉 △紅葉 △紅葉

△紅葉 △紅葉 △紅葉 △紅葉

△紅葉 △紅葉 △紅葉 △紅葉

△紅葉 △紅葉 △紅葉 △紅葉

△紅葉 △紅葉 △紅葉 △紅葉

△紅葉 △紅葉 △紅葉 △紅葉

△紅葉 △紅葉 △紅葉 △紅葉

△紅葉 △紅葉 △紅葉 △紅葉

△紅葉 △紅葉 △紅葉 △紅葉

△紅葉 △紅葉 △紅葉 △紅葉

△紅葉 △紅葉 △紅葉 △紅葉

魁の花ふせりきおふるま 梅里
[蕊王のこぼり]の如ふ山 囊中
母親の指の如系 合息せき 貫玉
[樹]の系親まの増の遠もあや 野明
[肩]ぬれぬの換あつらふ如系時 釵々
[横]髪ふぢりても赤く握り紫 李坡
[狂]くくくハ借よこしとる尾山
けおくされる余まの如多々 木端

紅葉五字對句

林端散餘綺 似燒非同火
木杪綺殘霞 如花不待春

詩 全七字對句 詩礎

紅霞迥遍 吳江內 殘照晚
錦綺粧成 蜀道中 斷霞秋

紅葉詞 杜牧

遠上寒山石徑斜 白雲生處有人家
停車坐愛楓林晚 霜葉紅於二月花

假山之楓光色欲然

折數枝以獻左右 併
恐散飛愛護為妙

尺牘 昏替ヲ記ス并ニ註解

光色欲然 楓樹掩映燦爛

楓葉潤色 紅燁々

楓カエデ 色いろ 熒あや 紅べに 折マ 数かず 枝えだ 以もつ 獻けん

左右サウバウ 為な 折マ 一ひと 枝えだ 獻けん 枕まくら 鑿う 鑿う

荒庭アラニワ 幾いく 枝えだ 聊たゞ 效たふ 芹せり 意い ○ 曲まが

圖ず 隅ぐ 固こ 之の 楓カエデ 為な 折マ 一ひと 朶た 當あ

野ノ 獻けん 但たゞ 恐おそ 散さん 飛ひ 愛あい 護ご 為な 妙たふ

艷えん 妍げん 不ふ 耐た 數かず 日ひ 移うつ 竹たけ 筒つつ 厭いと

風かぜ 霜しも 色いろ 如ごと 小こ 木き 賞あや 也なり

色いろ 如ごと 小こ 木き 賞あや 也なり

色いろ 如ごと 小こ 木き 賞あや 也なり

色いろ 如ごと 小こ 木き 賞あや 也なり

色いろ 如ごと 小こ 木き 賞あや 也なり

色いろ 如ごと 小こ 木き 賞あや 也なり

色いろ 如ごと 小こ 木き 賞あや 也なり

色いろ 如ごと 小こ 木き 賞あや 也なり

千載せんざい 藤原朝仲とうげんていぢゆう

毛け 如ごと ぬぬ 枝えだ 如ごと 風かぜ の 青あお いい して

ちち りり いい けけ けけ の ぬぬ 糸いと 入い たり

非ひ 色いろ 如ごと ぬぬ 枝えだ 如ごと 風かぜ の 青あお いい して

在あ るる も 冬ふゆ も 枝えだ 如ごと 風かぜ の 青あお いい して

秋あき 小こ ああ るる も 枝えだ 如ごと 風かぜ の 青あお いい して

濃のう 霜しも 滿み 徑みち 無な 紅べに 葉は

晚ゆふ 日ひ 高たか 枝えだ 有あ 白しろ 雲くも

詩し 色いろ 不ふ 變へん 松しょう 詞し 無な 名な 氏し

半はん 依よ 岩いわ 岫しゆう 半はん 是こ 雲くも

寒かん 一ひと 事こと 頗なほ 為な

清せい 節せつ 累るい トと 甘あま 木き が 加か ヘへ ヲを ツつ テて ジじ ヤや ャや

秦しん 時じ 曾そう 作さく 大だい 夫ふ 官くわん

ノの トと キき ニに 大だい 夫ふ ノの クく ハハ ンン ヲを ササ ツツ ケケ ララ レレ

破芭蕉 秋風ふやぶるくさう
世のこころうらこころふ

たんと多く奇ふとあり

非 秋風ふあうそふをたふく

狂 秋風ふあうそふをたふく

千土生 千土田の櫓。稲孫。稻

の 千土田より再ひ生さる

とふ古名あうらふいもつ

多 堀川百首

えりてむ田のひつらひこえて

積ふふふふふふふふふ

枯 道の木のもつ葉より

色つこかろとつふ

多 夫々 秋風ふあうそふをたふく

月吹らうらふふふふふ

非 秋風ふあうそふをたふく

うらばやつまるた松の隣まを桃溪

緑豆引 豆引。小豆引。実のう

らと此頃ひくこ

蕎麥刈 非 ほうもそらふて

若るまらるの声此親

草牡丹 紫衣菊。貴布祿菊

加賀菊。繡絡菊。

京も貴布祿菊とつふ大和

にて州牡丹とつふ中国筋まで

シウメイ菊と云地国かて加賀

菊とつふ

佛甲草 俗小岩蓮花とつふ

花ひらき実あり

小蓮花 岩蓮花とて葉細

長し

菊弱花 むらさき色ふさ

葉の長さ二尺ハ

かりにくと天南星小似より

この月根を堀るあり

櫛實 櫛の俗字といらぬの

実ふ大ふ似より櫛の食

櫛の食とつふはたはいちお

ハ毛ありかふハ毛なり

梅嫌 子と結ん(非)梅りた

種植 稷麥、油菜、蒿首、芥菜、紅花、蚕豆、水仙、春菜、大蒜、小麥、大麥

右の品々此月種をまきべし

移栽 牡丹、芍薬、竹、其外諸の果木此月うけ

植てこし月令廣義ふ出より尚又種まいた果木うけの仕中

諸茶此月取入は干様等まを委り日本歳時記九月の処不出

草用意 菓木より実をむき方

上十五日の内からゆれい実多し又菓初て熟るとは兩手にてさるべし年々実多し

実のさる木の実の寸法 のそいて穴とかり実のる木とよりゆんより

菓鳥の人のさる法 熟ると時ツツと取らざるべし取らぬ鳥とい

生類 此部ハ九月一ヶ月讞の生類を集めあす

尾越鴨 山と越ていふ小朝々々々き間ふらうら

此とたの鳥いふに毛隨分山のひくき尾とよりさうり小

越ゆりゆい各づく其外説多し(非)尾とかり鴨やとぐをさる果鳥

熊栗棚か 熊の冬ハ穴小入蟄して春と待

て出て木ふのかり好んで栗を食ふ又枝を折るべ鋪て石巖枯

木の中設く是と熊の架と云(非)白巻のふる木ぬりか柵とて

たみの然のそこより一為家(非)柵とが然そふはさふと其番

霜踏鹿 相うれの尾にふ(非)あうそづれぬらえたり定家

霜踏鹿 相うれの尾にふ(非)あうそづれぬらえたり定家

霜踏鹿 相うれの尾にふ(非)あうそづれぬらえたり定家

月の鹿を御令せしや船の影を暮
狂舟見くゝ系汝若る青い時麻も
そらふくゝ去りてさう付分く 百丈

詩 遠島百首韻子題 後鳥羽院

都門路 悴今誰問 クモコチカ

今ハタレモトハヌ カカタヨッテアルユハ 霜上 獨望

麋鹿 鹿 シモノフツタウヘラヒト

紅葉 射 射の此頃 鱈紅く成

田浦 入 丹木浦をより多出る

射 名月のまや 流るる系樹 伯光

豺祭 獸 非 豺の祭つとさうな

爵入 大水 為 蛤 非 我果と

右兩條も註口のニテ月令の祭出

網代 打 延喜式 日山城の宇治
近江 江 田上 氷 奥の 網

代各一處九月小始まり十二月
三十日小至まをこれと貢と見

えり今、網代木とる事
九月九日よりとむるよりあり

あゝる木と打し、川の早瀬
皮付の杭と上廣く下狭く左右

ふるく打て其下の狭く処小網
代守の床とぞ、篝火とたさ川水

のそア杭の中ふせられ入ふての
床の簀の上へより、氷魚と取

古説り見えり 如、茂真淵が百首

○名所ハ、宇知川。田上川。近江
の湖より、野川を、哥よりあり

氷魚 名抄 白き小魚

朝日山 更ふ 虫る 網代打 嵐雪

必用 此部ハ九月十月 天気占候
養生等 要用の事 記す

蜜柑と夏と貯方法 杉の箱の

うらふ竹とこしと糸にてつうろを

よくして下家火ぐらふ入かくべし

柿所貯る年中貯方法 ちよとまき梅と

厚このまのりと漆をそよくわら壺

ふ入かくとよりくしてかく

飲食 九月一ヶ月食物の類とあり先出と

新蕎麥 (非) 新蕎麥や客も給 仁も薬も可也

抽味噌 (非) 抽釜。抽干 此考及と麻豆は貯りたり玄坡

とち餅 榎の実と持き浸し粉 くりて團子とす

蒲萄酒 世俗の和制より物と 好酒ふぶとと浸し

置てそれとのり漢土の制と 異なるべし

九月部終

九月飲食 料理献立

禁 生姜 八九月多く食へば 春小至りと眼と病む壽

を撰下 筋力と減らす妊婦 こんと食へば生々子六指をじむ

霜 冬瓜今月食へば反胃と病む 霜うつて後食ふべし孫真人の説

好 雞肉 九月より十一月まで食 物 だし 稍補あり他月の宜りす

汁	さくら 後より 葉付とす
ららご	こんごうはも やまこ
めうぜ	小かぶら やの皮 牛蒡
あまご白やま	くらげたら
あまご	まこんぶ
あまご	こし

膾	こより ちくろが
せこほつ	白身おろしあま
うどひと	岩くすり
か	ころも

白身おろしあま 岩くすり ころも

取の... 本... 大... 小...

清汁... 大... 小...

差味... 大... 小...

煮物... 大... 小...

和會物... 大... 小...

吸物... 大... 小...

精汁... 大... 小...

膾... 大... 小...

清汁... 大... 小...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

差味

松茸の味
かきくけ

氷入るく
ゆりね
まわらけ

清和がた。炭くけ
くろく。まきくけ
くろく。まきくけ

ねこのり。ぬ
寺。枕くけ

石川豆腐
みんしん

平かんきり。梨
や。だんくけ
まき。くけ

煮物

ひのめ
ひのめ
やこい

竹勝くけ
干くけ
まきくけ

牛房
あがふ
かやく

たう乃いん
まろくけ
ゆいんくけ

ひんくけ
松がけ
せんきん

松茸。衣勝て
ごちり
くごわ

和會物

あけの
清和がた
まき

きん。まき
きんくけ
せんきん

はらまわき
あがふ
あききり

あききり
まき
まき

うごた
あがふ
あききり

まき
まき
まき

吸物

松茸
まき

松茸
まき



